日ロ交流

発行　：特定非営利活動法人　日ロ交流協会
E-mail:nichiro@nichiro.org
Home Page http://www.nichiro.org
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号
Tel：03（5563）0626　Fax：03（5563）0752

☆留学生便り（43）☆

ハバロフスク太平洋国立大学留学(3)

松本 泰男

4月18日（水）、今週に入って最低気温も零下を脱し、急速に暖かくなってきました。現在の予報では来週の中頃には最高気温が20度を超えそうな勢いです。今週から授業時間が週に4.5時間（1.5時間×3時限）増え、先生が一人入れ替わりました。今日がその新しい先生、ファイーナ先生の初日です。学生一人ひとりにきめ細かく、エネルギッシュに対応して下さる先生で、1時限目終了後に別の教科書を渡され、残りの2時限目と3時限目は私だけその別の教科書で同時に講義を受けました。凄いプロの先生に出会った感じです。

国際学生クラブ

少し時間を遡りますが、3月末の或朝、授業前、黒人青年と赤ちゃんを抱いたロシア人女性が、突然、教室に入ってきました。女性のお母さんもご一緒で、今日から一緒に勉強させて貰うので宜しくと言う事です。この黒人、アルフレッド君はシエラレオーネ人の32歳。中国各地で子供にバスケットボールを教えていたそうで、同じく中国で英語を教えていたロシア人のアンナさんと結婚。二人の共通語は英語。子どもが生まれたのを機に奥さんの実家があるハバロフスクにやって来たのでした。この大学にもバスケットボールチームがあり、早速お誘いが掛かっているようです。未だアルファベットの発音にも苦労していますが、家族が皆ロシア人ですから早晩ペラペラになることでしょう。羨ましいことです！

この大学には「国際学生クラブ」の集まりが月に数回あります。3月は「英語で話す」がテーマで、多少英語が話せ（そうに見え）る私に白羽の矢が立てられ、MCを仰せつかりました。各自の趣味や旅行の話・失敗談などを披露して貰いましたが、英語のレベルは様々で、どんなにたどたどしくても兎に角最後まで英語で話してくれる人、途中からロシア語や母国語に戻る人など様々です。先週の集まりも英語で、「海外留学の意味」、「テクノロジーの進歩と人間の幸せ」等など、少し重い話題でしたが、皆さん話しきれなかったようで今週末に持ち越されています。海外留学の経験は帰国後の国内での就職に必ずしもプラスにはならないとの意見も有り、様々な政治的状況が就職に影響を与える様子が伺えて複雑な思いを抱きます。

4月23日から26日にかけて「ロシアに於ける日本」年の一環として「日本映画祭」が当大学で開催されます。初日は「武士の献立」、次に「幼獣マメシバ」、「テルマエ・ロマエ」、「誰も守ってくれない」と続きます。ハバロフスク総領事館後援の文化交流事業の一環です。勿論私も見に行く予定ですが、授業時間と重なるところが微妙です。

5月には隣の大学で「日本語カラオケコンクール」が開催されます。こちらも総領事館の後援です。日本にいるとあまり感じることはありませんが、ロシアの人達の日本に対する興味の深さは私達の想像を遙かに超えています。政治・経済・外交のみならず、様々な形の文化交流を支える総領事館の皆様に頭が下がります。それでは又。（理事）

お知らせ

●第52回マトリョーシカ絵付け教室

日時：2018年5月20日（日）13：00～16：00
講師：菅野エレーナ
場所：田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」2階造形表現室
会費：3,000円（5個セットの教材、講師代、お茶代含む）
＊第53回の教室は6月17日（日）13：00～16：00です。
＊6月23日（土）～24日（日）に「男女平等参画フェスタ in リーブラ2018」に参加。展示会や体験教室、一部販売もしますので、是非覗きにいらしてください。

●相撲観戦（2）：5月19日（土）
好評により、今年2回目の相撲観戦を実施します。

●ロシア語クラスまだ入れます！
ゼロからクラス（月）13：30～14：30
初級会話(月)19：30-21：00、入門クラス(水)18：30-19：30
準中級(月)18：00-19：30、中級会話(火)18：30-20：00
忙しい方のための中級（第4土）13：30-15：00
＊お問合わせ、お申し込みは協会事務局までお願いします。
Tel：03-5563-0626　E-Mail：nichiro@nichiro.org

●第48回　懇話会
講演会『ロシアを跨ぐ国際輸送回廊一帯一路・北極海航路・シベリアランドブリッジ』講師 辻　久子氏
今や一帯一路を掲げた中国から目が離せない。インド洋から欧州に抜ける「一路」に加え、北極海航路に深く関与し「一帯二路」を目指しているかのようだ。国際物流の専門家 辻久子氏にその辺の事情を詳しく語っていただきます。
日時:6月23日（土）1:30～3:30(開場1:00)
講演後講師とのフリートークタイムあり。
会場：東京外国語大学 本郷サテライト4階
文京区本郷2-14-10 TEL5805-3254(土曜:080-4325-9981)
アクセス:地下鉄本郷3丁目徒歩5分、JR御茶ノ水徒歩15分
会費:会員2,000円　日ロ友好団体会員2,000円　一般2,500円
会員学生1,200円　一般学生1,500円　外国人学生1,200円
申込方法:学生／会員／一般の別・氏名・電話・E-mail明記の上、FAX・E-mail・郵便のいずれかの方法で協会事務局まで。
満員になり次第締め切りますのでお早めにお申し込み下さい。
スタッフ募集 simatac37@gmail.com 080-4325-9981 川島

皇居・江戸城跡めぐりウォーキング

安田 愛

《Я не люблю весны（春は好きではない）》と詩に書いたプーシキンも、この晴天の日ばかりは顔がほころぶに違いない。このような想像が容易にできてしまうほど温かい春風が吹く3月24日、皇居にて開催されたウォーキングイベントに初めて参加しました。

参加者は総勢40名ほどで、内訳は日本人学生5名、ロシア人・ネパール人・バングラデシュ人計10名、日本人社会人が24名でした。家族連れの参加もあり国籍や年齢が豊かで賑やかなウォーキングとなりました。

大手門から東御苑へ入り、英語ガイドと日本語ガイドの2グループに別れて1時間以上の皇居内の様々な説明をいただきました。私は英語ガイドへ参加し、ネパール人のご家族や友人と歓談しながら初めての皇居の一端を楽しむことができました。

ガイドでは、江戸城や歴史の説明についてユーモアを交えて説明いただき、大変興味深いお話をお聞きしました。入口からほど近い百人番所は忍者がいたと言われており、その先の本丸に行くための3つの番所は本丸に近づくほど位の高い武士が守っていたそうです。江戸時代は大きな戦はなかったものの、城としての堅牢な構造を十二分に感じられました。石垣は徳川家康が各地の大名に石の形状・寸法まで指定して各地から運ばせて築いた堅牢なもので、今も当時の姿のまま残っていることに驚きました。一方で、5回の大火によって本丸書院門や本丸など貴重な建築物は次々に焼失しています。再建しなかった理由の一つとして、江戸の町の復興に優先的に費用を割いたというエピソードは、その時代の大火がいかに悲惨なものだったかを改めて感じざるをえませんでした。

そのほか、ハマナシという珍しい日本のバラや雅楽を興ずる音楽施設、皇族の住居や諏訪の茶室など、目につきにくいような施設の説明もいただきました。二の丸植物園では天皇陛下が植えられたコブシもお目にかかることができました。

日本語ガイドではクイズ形式で「下馬評」「千秋楽」など江戸城にちなんだ言葉の起源の説明や、江戸時代から戦後復興までの詳しい説明などもあったそうです。両ガイドの参加者は皆熱心に説明を聞いており、外国籍の方もとても貴重な体験だったと仰っていました。

皇居には40種・200本以上の桜があるそうですが、大変美しく咲いていました。ガイド終了後は、苑内の原っぱにシートを広げて桜を愛でながら軽食と歓談をしました。各々ロシアや仕事の話題などに花が咲いていたようです。

美しい桜と国際交流、皇居・江戸城の説明と、とても充実した気持ちの良い一日を送ることができました。日ロ交流協会のみなさま、企画いただきどうも有難うございました。

（早稲田大学卒・国内化学メーカー勤務）

楽しい時事ロシア語クラス

中村 泰弘

大体隔週で土曜日の午後13時半より、2時間くらいやっている時事クラスについて書かせていただきます。

講師は配島亘（はいじま　わたる）先生で、東京外国語大卒のすらりとした方で職業はフリーランスのようです。あまり詳しくは聞いていませんが、本業は主に古書とかの本を取り扱う仕事をされていて、たまにメディアのロシア取材や学術研究者のお手伝いをしたり、通訳をされたりいろいろなさっているとの話です。

協会の他に社会人向けに文法を修了した位のレベルの生徒たちにも時事ロシア語を教えていらっしゃるそうです。日本のメディアでは話題にされないようなトピックスや、複数メディア間の温度差、新しく使われるようになった表現や逆に廃れた言い回しなどを、実際の記事を通して教授するのが配島先生のパンと塩、つまり持ち味とするところです。

先生はあまり授業中あれこれ口出しすることはありませんが、生徒から聞かれたことにはきちんと答えていただけますし、時々さしはさむ解説はさすが学問としてロシア語文法をしっかり習得されただけあって詳しく、目からうろこが落ちることもままあります。

まだ3月に開講したばかりですので生徒3名の反応を見ながら手探りで進めている感じです。週刊紙「論拠と事実」のweb記事から2つ位選んで次回の宿題に出してもらい、授業はそれらのテキストを音読して逐次和訳していきます。例えば前回は外交官退去の事件をテーマにしたインタビュー記事でした。

実は生徒の3人は、昨年末まで鳥居先生のもとで記事の翻訳を長年勉強していた仲間たちです。先生ご自身が続けることが出来なくなり、一時クラスは解散しましたが、せっかく続けてきたのに学習の機会がないのは勿体ないという声があり、配島先生を紹介されて相談にいったところ講師を快諾いただいたため、再び開講することにしました。

そのようないきさつもあって、今のクラスは皆んな翻訳のアマチュアながらも年期を積んだベテランの生徒ばかりで、授業の様子は、一読すればだいたい理解できるというテキストを仲良く一緒に取り組んでいるといった風景です。けれども、たとえあなたが翻訳は初めてだとしても、配島先生は「いままで読めなかった記事を読めるようにするための手ほどきをする」ことをご自身のモットーとしていますので、文法を一通り終えていればチャレンジングだと思わずに参加してみてはいかがでしょうか。受講料は一回2千円です。

当クラスは、協会の中に7～8あるクラスの中でも日本人にロシア語を教わる唯一のクラスです。ロシア人には聞きにくいことも日本語で気軽に尋ねることができます。以上活動報告半分、ＰＲ半分で書かせていただきました。（常任理事）

ロシア通商代表部での着物体験交流

千葉 麻里

4月11日（水）午後2時より、品川のロシア通商代表部ホールできもの体験交流を実施しました。これは、毎年春に通商代表部からのご希望により行われるものです。

この日は日頃、着付けの仕事で一緒になるベテランの先生方4人（清水、林、小泉、辻田）の先生方と長年うちで勉強している佐佐木さんに来てもらって、計6名でお着せしました。前もって送ったきものの箱2つと、それぞれの先生方が持参してくれたきものを合わせて、通商代表部で準備してくれた敷布の上で、4時頃まで。仕事の合間に三々五々ホールに入って来ては、皆さん、好きな色の振袖などを選びます。女性は12名、男性4名、男の子4名、女の子6～7名くらいでしょうか。今年は、小さな1～3歳くらいの子どもが多く、七五三のきものを紐であげたりしながら着せました。

子どもたちが華やかに仕上がると、ご両親は大喜びで一緒に家族で写真を撮る様子があちこちで見られました。子どもはやはりどこでも宝ですから、いつもより皆さんの笑顔が増えたように思えます。着付けの先生方も、色の白い可愛い子ども達の姿に思わず顔が綻んで、手持ちのスマホで時折カメラマンになっていました。

昨年は大使館でも子どもの着付けが増えて、中古の小さいきものを多めに購入しておいたのが役に立ちました。日本人の子どもたちは落ち着きがなく、明治神宮の七五三のときもいかに早く着せるかで苦労します。ロシアの子どもたちは大人しいので少し楽に感じます。1歳くらいの子はさすがにいつもと違う様子に泣いたりしていましたが、お母さんが上手にあやすのでしっかり写真に納まりました。

最後にロシアのご婦人方の手作りのケーキでお茶をご馳走になり、それぞれチョコレートを頂いて帰りました。エレーナさんたちの心遣いにはいつもながら感謝いたします。また、平野理事と坂本常任理事が見学に来てくれました。着付けの皆さんも毎年ありがとうございます。

（常任理事）

ロシア人の雇用に対する認識

津田 憂子

筆者は仕事柄、ロシアの公的機関や非営利・非政府組織に勤務している人間と知り合うことが少なくなく、話のついでに組織の運営面について質問することがあります。今回はそうした経験からロシアにおける雇用に対する認識について考えてみたいと思います。

以前、ある非営利組織（所在地はモスクワ）の所長の方に、組織を運営するための予算について伺ったことがありました。この組織の予算は大体、政府機関から70%、産業界や外部の組織から30%という内訳になっていました。驚くべきことに、政府機関からの70%の予算も含め、この組織ではすべて予算を契約ベースで競争的に得ているということでした。

「予算をすべて契約ベースで競争的にとってくることは、組織の経営上、特に雇用の問題との絡みでリスキーではないでしょうか」と思わず質問してしまいましたが、話は組織間の契約の話に留まらず、組織と個人の契約の話にも発展していきました。所長曰く、「ある組織に必ず雇用されなければならないという考えは間違っています。というのも、政府機関であれ他の組織であれ、ロシアではある組織に仮雇用される期間は最大で2か月2週間と定められていて、この仮雇用期間の終了とともに雇用を打ち切られる場合もあり、決して安定した地位を保証するものではありません。それゆえロシアでは、契約ベースの雇用こそ、未来を保証する役割を担っているのです。契約を結んで雇用したり予算を確保したりすることは、より慎重でより安定的な選択と言えます」という答えが返ってきました。この発言の内容がロシアの法律に本当に即しているかどうか、その真正性を筆者は確認していません。よって事実と違うとのご指摘があるかもしれませんが、少なくとも筆者が聞いたこのロシア人の所長はこう回答しました。

このやり取りが大変興味深かったのは、契約社員が会社とある一定の期間契約を結んで職務に従事する体制の方が、将来を保証するより安定的な選択であると考える人が少なからずロシアにいるという事実です。日本では全く逆の認識ではないでしょうか。もちろん、上記の発言はいささか極端ですし、日本の契約社員制度と単純に比較できないことは承知していますが、それでもロシアにおける雇用、或いは就職に対する認識は日本と随分異なるように思います。日本では就職活動の時期が毎年決まってやってきて、初々しい感じでスーツを着込んだ若者を目にしますが、ロシアでそのような光景をまず目にすることはありません。そもそもロシアではスーツを着ている人間の割合が圧倒的に少ない印象があります。日本はしばしば、終身雇用の割合が相対的に高い国（つまり人材の流動性が低い社会）で会社を辞めて失うものが大きい構造になっていると指摘されるのに対し、ロシアは人材の流動性が比較的高い社会で、大学卒の若者が起業できる環境が日本より整っていると述べる専門家もいます。

ロシアでは会計年度が日本と異なり、1月～12月のサイクルです。そのため、日本人が4月に覚える感覚とはまた違った感覚がロシアにあるのかもしれません。しかし共通しているのは、5月の上旬は大型連休がやってくるという点です。日本は「ゴールデンウィーク」、ロシアは「5月の休暇」が間もなく始まります。（JST研究開発戦略センターフェロー）

お願い

NPO日ロ交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円から、いくらでも結構です。

振込先：郵便口座00160-9-66486、加入者：日ロ交流協会

内堀學氏、野口久美子氏、山岸ひさ子氏にご寄付いただきました。ご協力有難うございます。

ウラジオストクの「歴史的風土」とは何か？

倉田　有佳

3月末、「日本・ウラジオストク協会」の理事会・総会に出席した。同協会は2007年に設立された民間任意団体で、会長が中本信幸神奈川大学名誉教授、名誉顧問は初代ウラジオストク総領事の廣瀬徹也氏、会員には元外交官、元ウラジオストク日本センター所長、歴史・演劇・音楽・書道・絵画の専門家、祖父が20世紀初頭の「浦潮」で商店を構えていた方、と実に多彩だ。

アレウツカヤ通りに建つ問題の建物（2013年著者撮影）

年1回の理事会・総会は、会員間の貴重な情報交換の場となっている。今回真っ先に話題に上ったのは、「浦潮」時代の日本人商店の建物（銘板付き）のことだ（写真）。所有者の極東連邦総合大学によって売りに出されているのだが、市中心部にあるため、近代的な商業ビルに建て替えられる恐れがあるというのだ。

これに関連して思い出されたのは、1980年代半ば、日本人町だった一帯（現在「ヒュンダイホテル」が建つ周辺）の建物群の取り壊しに反対し、近くの小公園で抗議集会を開いた人たちがいたことだ。このデモに集ったソコロフさん、当時は極東大学で歴史を学ぶ学生だったスヴェトラーナさんによると、規模はごく小さなものだったようだ。ペレストロイカが始まっていたとは言え、まだソ連時代だ。彼らの勇気ある行動に驚いた。

ちなみに筆者が暮らす函館には、「函館の歴史的風土を守る会」がある。この団体は、旧渡島支庁庁舎の札幌（北海道開拓の村）への移築に反対した人たちを中心に1978年に創設された。問題の建物は、明治末年に完成し、函館区から函館市となった1922年から1950年まで庁舎として使われた。しかもその場所（現在の元町公園）には、豪族河野政通が「箱館」の由来となった館を建て、19世紀初頭には幕府が箱館奉行所を置いた歴史がある。市の文化保護委員会の決定に異議を唱えたのもうなずけよう。

さて、話を協会の総会に戻すと、戸泉米子さんの回想録で、極東大のゾーヤ・モルグン先生がロシア語訳を手掛けた『リラの花と戦争』の全訳（ロシア語で“Сирень и война”）が出版の運びとなったことが紹介された。この本には、ニーナ（戸泉さんのロシア名）が愛した20世紀初頭の国際都市浦潮斯徳、国や民族を越えた愛や友情、そして「暗黒の時代」に飲み込まれていく自身の人生が描かれている。

21世紀のウラジオストクに生きる極東大生にはモルグン先生の前作“Японская мозаика Владивостока: 1860-1937”（邦訳『ウラジオストク：日本人居留民の歴史1860～1937年』2016年）と併せてこのたび出版される翻訳本を読み、ウラジオストクの「歴史的風土」とは何か考えてほしい。

（ロシア極東連邦総合大学函館校教授）

エカテリンブルグからのお客様

岩本　智子

エカテリンブルクから、武道の指導者ヴァジム・ザーニンさんが来日した。4月20日から、4月25日まで明治神宮で行われる弓道セミナーに参加するため、ホームステイ先を探しているとのことだったので、土日に我が家に泊まって頂いた。ヴァジムさんには2016年の文化交流団の際いつも同行して頂きお世話になっていたので、今度は私たちが支援出来ることは嬉しい。ヴァジムさんとはニコライ堂で再会した。エカテリンブルクで初めて会ったときと同じ、青い地下足袋を履いて闊歩していた。今回娘さんのヴィクトリアさん（ヴィカ）と一緒である。ヴィカは13歳、ちょっとはにかみ屋さんな感じだが、礼儀正しい女の子である。日本のアニメが好きと聞いていたが、スタジオジブリのキャラクターのリュックサックには、美少女やイケメン男子などアニメの缶バッジをたくさんつけていた。我が家には、13歳の女の子にとってはあまり面白いものがない。夫の漫画を眺めたりしていたが、ちょっと手持ち無沙汰そうである。夕食にちらし寿司を作ろうと思い、母から譲り受けた飯台を出してきた。ヴィカとヴァジムさんにも木の香りを楽しんでもらい、酢飯を切るときには、ヴィカにうちわであおいでもらった。みんなで料理を作るのは万国共通で楽しい。サンドイッチも用意していたが、お2人はご飯好きである。お米が美味しいと言って下さった。私は炊飯器を使わず、鋳物の鍋で炊くが、ヴァジムさんとヴィカは違いの分かるロシア人だった。あり合わせの布団とソファベッドを並べた寝室は北向きなのでドア側が頭になる。少し違和感があるだろうと思い、窓を指して「Потому-что, эта сторона-север」と言ったら、ヴァジムさんはすぐに納得した。「北枕」をご存知だった。朝、明治神宮まで案内すると、「よかったら稽古を見ていきませんか?」と武道場に入らせてもらった。中は外国人があふれていた。ヴァジムさんによると1000人近くの人が世界中から集まっているとのことだった。様々な顔の色をした人たちがきちんと並び一斉に礼をした。その後、グループに分かれ順番に矢を射るのを師匠が一人一人指導する。ヴィカの番が来て的に向かうのが見えた。白い弓道着に黒い袴でゆっくりとしっかりと弓を引いていた。ジブリのリュクサック姿のヴィカとは見違えるような、凛とした美しさだった。師匠の指導を聞いて一礼して去って行くのをみて、しみじみ感心した。13歳で慣れない日本人の家に泊まり、弓道のセミナーや試験をこなし、お父さんの仕事に同行するのは立派だと思った。「弓道は好きですか？」と聞くと、にっこりして「Да!(はい！)」と言った。

千葉事務局長が食事会を設けて下さり、2016年の文化交流に参加した望月理事、ロシア語堪能な中村常任理事と田牧さんが集まった。驚いたことには、2016年にエカテリンブルクで通訳をしてくれたウラジーミル・クラブチェンコ（ボーバ）さんが合流した。今、日本で技術者として仕事をし、技術革新を進めているとのことを日本語で話してくれた。ヴァジムさんは、今回東京のほかに神戸や大阪の大学も訪問し、人脈を広げるのだとおっしゃっていた。目的に向かってシンプルに進むみなさんは素晴らしいと思った。（常任理事）

＊ヴァジムさんとボーバさんは2014年の第12回日本文化交流団でも現地でお世話になっているので16年で2回目になる。また、受け入れ先だったエカテリンブルグ情報文化センターの前センター長マリーナ・ゴロミドワさんは旭日賞を受賞。今年3月に望月、中村泰弘、坂本、千葉で祝賀パーティーに出席した。（附）